

し合いながら死に至る」愛の勝利を奪い取られたようで、その必要性があるのかと悶々とした気持ちで終演を迎えた。

(中 東生)

### ● Opera バイエルン州立歌劇場 《アイダ》

バイエルン州立歌劇場の今シーズンは、ミュンヘン中が浮き足立った“カウフマンの《アイダ》”で始まった。それに先駆けて、別キャストでワーナーから発売されたCDが店頭に並び、ミュンヘンが生んだスターテノールのラダメスを生で聴こうと、聴衆が殺到したためだ。

そのCDでは、バッパーノの指揮に支えられていたカウフマンが、ダン・エッティンガーの棒に慣れていない様子の初日、9月25日に所見したのだが、少なくともこの晩の主役はそのタイトル通りアイダであった。クラッシミエラ・ストヤノヴァには冒頭、もう若くない声と、彼女の持ち味である柔らかい響きに、アイダを全幕歌い通せるのかと勝手な不安を抱いたが、それが杞憂に終わったという以上の出来で、イタリア的な歌唱法を忠実に踏襲し、上品なエチオピアの女王を体現した。ディミトローヴァやカバイヴァンスカが本場のイタリア人を唸らせた、ブルガリア人のハイレヴェルなイタリアオペラ歌唱技術を受け継いでいて頼もしい。クリストフ・ネルの演出は舞台を現代の戦地に置き換えており、それ自体にはもう驚かないが、最後に主役の二人が自刃するのは、アイダ特有の「愛